

---

# メタル・コア

ダメンズX

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

メタル・コア

### 【著者名】

ダメンズX

### 【あらすじ】

有機生命体に寄生し、宿主を機械生命体に変え支配する物体『コア』。

『コア』を巡り裏で繰り広げられる戦い、そして巻き込まれし者達

ハイテク都市を舞台に繰り広げられるSFアクションストーリー！

## 第一話・少女とメダル（前書き）

懲りずにまた書きます。

前書きや後書きに登場人物や用語の解説や元ネタを書いていこうと  
予定しています。

飽きっぽいですが何とか頑張ります。

## 第一話・少女とメダル

古くから続く産業工業都市、技阿市。

そこにある東技阿高校は、今日の授業が全て終わり、生徒達が部活や帰路に向かう最中であった。

生徒用玄関から制服を着た一人の少女が出てくる。

「はあー、ようやく学校終わつたよ。毎日毎日、ダルいよ。」

セミロングの黒髪をした少女、南部 星火がダルそうに咳く。

「星火つていつも同じ事言つてるよね、今日はいつもより早く終わつたからマシでしょ。」

星火の隣でボブカットの少女、綾瀬 沙夜が呆れた口調で言つた。

「だつて授業内容ハードル高すぎー」星火が咳くように文句を言つ。高校の授業内容ハードル高すぎー

星火は頭は悪い方ではないのだが、自身が言つた通りこの町の学校は全体的に知性が高いエリート高校の集まりなのである。

加えて星火自身勉強が余り得意ではなく、言わば脳筋タイプなのである。

ある都合でこの町の学校に通わざるを得なくなつた星火の成績は回りのレベルに追いつけず、中学時代では中間的な学力も下に下がつてしまつた。

「まあそういう文句を言わずに…、所でさ、放課後どうする？」

星火を励ましながら沙夜が放課後の予定を聞いてみた。

沙夜は星火が初めて高校に来た日に会話をした事が切つ掛けで意気投合し、今では仲の良い友達となつている。

「そうねえ…、折角早く終わつたんだから…。」

どうしようかと星火が暫く考えてると、ふと何かを思いだした。

「ねえ沙夜、この間隕石が落ちたつて騒ぎがあつたよね」

「…ああ、確かに少し前位にあつたわね、確かに落ちた場所がここから近い公園だったっけ？」

一人が話しているのは5日前に高校の近くの公園に落ちた隕石の事である。

とは言え其ほど大きな事態にはならず、隕石も小さかつたため精々公園の一部の平野が少し荒れた程度ですんだ。

「その墜落現場、今から見に行かない？」

「ええ、あそこ行つても大丈夫なの？」

星火の提案に驚く沙夜。

「大丈夫、落ちた所に直接入らなければ良いし、調査も終わつたつて今朝先生が言つてたぢやない。もしかしたら何か見つかるかもよ」

はしゃぎながら言つ星火。

（調査が終わつたんだったら何も残つてないと思つんだけど……）

沙夜はそう思いながらも軽いため息をついた。

「……まあ、どうせヒマだし……、付き合つてあげる。アンタ一人だと何でかすか解らないものね」

「何よその言い方は……」

今後の予定を立てた二人は早速隕石の墜落現場に向かつた。

同時に……、技阿市に近い国際空港、様々な人々が行き交うターミナルに一際目立つ少人数の集団が姿を見せた。

全員が黒を基準としたスーツを着込み、黒いサングラスを掛けしており、男性が全体的に多いが、女性の姿も確認出来る。

するとその集団に一人の男が駆け寄つて来た。

灰色のスーツに黒縁のメガネを掛けた何処にでもいる様な姿、持つているトランクには何処かの会社のマークが描かれている。

『ミスター・マーチンですね？』

男は集団の先頭にいる黒人に向かつて丁重な英語で話し掛けられて來た。

「その通りだ。懃々迎えに來てくれて感謝する。私を含めメンバ

ー全員が日本語を話せる……無理に英語を話さなくても良い。」

マーチンと呼ばれた黒人男性は流暢な日本語で話した。

「これは失礼…、改めましてマーチン少佐、ようこそ日本へ、私は、  
村紗コーポレーションの武治と申します。以後、お見知り置きを…」

そう言いながら武治は頭を下げた。

「皆様を至急本社にお連れしろと社長に言われておりまして…、  
早速向かわれますか?」

「ああ構わない、我々とて早く終わらせたいのでな…。」

「ではこちらへ…私の後を付いて来て下さい…。」

武治は後ろを向くと歩き始め、マーチンと黒づくめの集団は後ろから付いて行く。

すると集団から一人の女性…とは言い難い少し幼さが残る少女が  
マーチンに近寄り、小声で話し掛けた。  
(早速行動に移りますか少佐?)

(いやまだだ、決定的な証拠が見つかるまで取り敢えず動くな…!  
この会社は腹に何かを抱えている、俺達…いや、お前を狙ったトラ  
ップかも知れん…、暫くは様子見だな…、他のメンバーにも伝える。  
)

「うわあ〜、結構深いクレーターねえ」

墜落現場に出来たクレーターを見下ろしながら星火が言う。

普通の公園よりも多少は広いこの市民の憩いの場の真ん中に空いたクレーターは、隕石の衝撃の凄さを物語っていた。

「だけど、やっぱりないねー隕石。」

「もうとっくに調査団の人達が持つて行つたんでしょ。」

立ち入り禁止の囲いの前で身を前に出している星火に対し沙夜がそう答えた。

暇潰しに来てみたは良いが特に何も目ぼしい物は見つかっていない  
い。

「はあ〜つまらない。隕石の欠片でもあつたら拾おうと思つたの  
に…。」

「なに言つてゐるの、……ここにいても何もないみたいだし、違つ所へ行こう。」

「あ、待つてよ沙夜……ん？」

星火がふと足下を見た時、何かが光つてているのが見えた。

「なんだろ？……？」

光つた場所を良く見ると、何かが埋まつてているようだ。

興味が出てきた星火はそれを掘り出して見ると……、

「……メダル……？」

丸い金属で出来ており、小銭やコインより大きいそれは一見するとメダルの様に見える。しかし……、

「なんでこのメダル、赤いの？」

そう、そのメダルは赤い金属でできていたのだ。

さらに、砂に埋もれていたにも関わらず、メダルには傷一つ付いてなく、太陽の光を反射して新品の様に輝いていた。

「不思議なメダル……。」

「星火ー、置いてっちゃうよーー！」

「まつ、待つてーー！」

沙夜に声を掛けられハツとした星火は、無意識にメダルを制服のポケットに入れると、沙夜の方へ向かつて行つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4599q/>

---

メタル・コア

2011年10月6日01時28分発行